

震災の備え

——キリスト教の立場から・三年目の被災地から——

名古屋キリスト教協議会講演会要旨
2013年5月26日 名古屋YWCA
東北ヘルプ事務局長 川上 直哉

名古屋の主にある姉妹・兄弟の皆様のお計らいにより、講演をさせていただきました。日本イエス・キリスト教団名古屋教会での祝福溢れる礼拝の後のことでした。この一日は、東北ヘルプにとっても、川上にとっても、転機となるべき大切な日となりました。感謝して、講演の要旨を以下にまとめます。

0. 講演の構成

三年目の被災地から見える事柄を、キリスト教の立場から、過去・現在・未来に分けて、「震災の備え」について語る講演とした。

1. 備えるために＝現在を知る

現在を知ることで、「備え」の準備となる。被災地の現在は、「孤立」と「不安」によって概括される。

(1) 「孤立」：津波被害と風化

a. 三年目の被災地から：石巻の事例から、風化という現実を語った。津波被災地の多くの場所で、既にその傷跡が見えなくなっている。しかしその痛みはそこに住まう一人一人に深く刻み込まれている。このギャップに、被災者の孤立感が際立つ。

b. キリスト教の立場から：日本基督教団被災者支援センター・エマオを典型例として、祈りの力について考える。それは「復興」を声高に叫ばない。むしろそれは「スロー・ワーク」を掲げる。それは教会が持っている、孤立に対応する大きな可能性である。

(2) 「不安」：放射能の今

a. 三年目の被災地から：「4年目」の前年の不安が、とりわけ福島の人々を脅かしている。チェルノブイリの知見は、「4年目」以降に放射能による健康被害の顕在化することを示している。既に「原因不明」の病の後半に広がっていることが、複数報告されている。

b. キリスト教の立場から：キリスト者は、不安に抗する祈りの輪を持っている。キリスト者は、広範な職域・地域に存在している。このつながりを保持することが、現在の急務となっている。

2. 備えとして＝過去を学ぶ

現在の課題から、過去を顧みる。それは、未来への「備え」の第一歩となる。

(1) ネットワーク

a. 三年目の被災地から：95年の阪神震災と今次の災害を比較するとき、宗教者の被災地での存在感が際立って異なった。宗教者は、勢力拡大競争を措いて、困窮する人々のために公共空間へ出て行った。95年と11年を比較して異なるのは、諸宗教間のネットワークが形成された事であった。

b. キリスト教の立場から：ネットワークを語るならば、キリスト教において、とりわけ1960年代以来の積み上げがあったことに、注目しなければならない。教会は地域に密着していた。その教会が、世界と直結していた。支援はそこに展開した。放射能禍についても、このネットワークは活用されなければならないだろう。

（2）超教派連携／諸宗教協働

a. 三年目の被災地から：宮城の歴史・福島をみると、それぞれに諸宗教が果たしてきた役割が見えてくる。それは今次の被災地において注目され、活用された。諸宗教は地域と密着して存在している。地域の歴史を学ぶことは、諸宗教を学ぶことになった。

b. キリスト教の立場から：キリスト教においても、とりわけ日本の歴史において、イエスとキリストを分けて考える新約学が展開した。それは巨大な副作用を残しつつも、キリスト者に「イエスのように」生きる動機づけを与えた。現場に、十字架が立つ。その十字架においてのみ、キリストは見出される。この一点において、教派間・宗教間の壁は崩壊する。その根拠になったものは、現代におけるキリスト教の歴史に培われたキリスト論であった。

3. 備えを始める：未来へ

以上を踏まえて、どのような「備え」が可能か、未来への提言を纏める。

（1）遺産の確保

a. 三年目の被災地から：阪神・中越・東北と、震災は続いた。その現場の声に聴くことが重要である。その結果出てきた様々な方法論は、その地域と時代に制約されて汎用性に欠けるかもしれない。しかしそこに響いた声は、普遍的価値を持っている。「現場の声」を今から集めることは、有効な「備え」となるだろう。

b. キリスト教の立場から：70年代・90年代の「挫折」に学ぶことが重要である。過去を振り返ると、上記のような成果の背後に、挫折と蹉跌があったことを知らされる。今、その足取りに学び、過去の遺産を確保しておくことが（2011年の震災の「遺産」も含めて）である。

（2）それぞれの現場へ

a. 三年目の被災地から：被災地へ招待したい。「行く位なら、お金を送ろう」という志は尊く感謝の限りであるが、今は、その逆が必要であるように思われる。被災地には「現場の匂い」が強く薫り、「現場の風」が強く吹いている。それは聖霊の息吹である。私たちは被災地で、現場を思い出すことができる。そして現場は、実は私たち日常生活の中にも伏在している。そして、現場には十字架が立っている。十字架に復活を見出すのは、教会の特権である。復活を宣言するのは、教会の責務である。絶望の闇に覆われた地に、復活の希望を語る。闇の中に光のあることを宣すること。被災地に立つとき、それが各地で新たに始まるかもしれない。そこには、今後への「備え」そのものとなる可能性が蔵されている。

b. キリスト教の立場から：上記に「教会」と書いた。教会こそ、「備え」の核心となる。「奉仕」「交わり」「宣教」をその中核に持つ教会の重大性を思う。日常の現場に奉仕をもって切り込み、痛みの内側から福音の調べを奏で立て、そこに新しい交わりを生み出すこと。それは教会にできることである。平時、教会が潜在する現場に立つことができるか。ホームレスや自死といった「大きな」事案に限らない。家族の諍い、深く刻み込まれた憎悪、根深い不信。そうした「小さな」現場に、教会が立っているだろうか。もし立っているなら、それ自体が震災の備えとなるだろう——ルカ16章10節！